

翻訳

ハイネ・クテヴァ著『世界文法化事典』の露語書評

小林 潔

出典および書評対象：

Майсак Т.А. [Рецензия]//Вопросы языкознания.— № 5.—2003.—С. 134 - 139.

B. Heine, T. Kuteva. World Lexicon of Grammaticalization. Cambridge: Cambridge University Press, 2002. 387p.

解題

ロシア科学アカデミー刊行『言語学の諸問題』誌（2003年第5号）にハイネ・クテヴァ両氏の近著『世界文法化事典』の書評が掲載された。

ベルント・ハイネ氏は文法化理論の開拓者として世界的に名高い。2003年9月には日本認知言語学会・日本独文学会の招待で来日し、セミナー、講演を行った。本会「早稲田言語研究会」でも有志によって、彼の "Cognitive Foundations of Grammar" (Oxford UP, 1998)の講読会が行われている。『言語はなぜ今の姿をしているのか 文法の認知的基礎』という題で翻訳出版を企画中であって、訳稿初稿は既に完成している（著者翻訳承認済み、出版社未定）。

書評者はマイサク氏。詳しい経歴は不明だが、2002年にカンディダート号（PhD相当）論文を発表していることから、若手の研究者だと思われる。

訳出上の注記：

原文隔字強調は【】で示す。

適宜、訳者が改行を施し、英語原文・訳語を補った。

原注はアラビア数字脚注で、訳注は、〔 〕とローマ数字脚注で示す。

ロシア語はラテン文字化し、適宜、原綴りを示した。人名等、西欧語文献で一般に用いられている表記と異なる場合がある。

путь は「道程・方策」、переход は「転移」とした。

грамматические показатели は「文法指標」とした。

Cercle linguistique de Waseda (ed.)

Travaux du Cercle linguistique de Waseda. Vol. 8., 2004. 66—75.

書評記

ハイネとクテヴァの近著『世界文法化事典』は、文法指標の生起・発達の通常の道程・方策をまとめた事典・便覧である。本書では、数百（400以上）の典型的な文法化の過程について情報が与えられ、世界の多数の言語（およそ500）の例、注釈、相互参照が掲載されている。

ベルント・ハイネは、ケルン大学アフリカ学研究所の教授。当代を代表する言語学者の一人であって、文法化の諸問題に関するものも含め、著作は多い（彼の見解に関する全般的な紹介・評価は [Plungian 1998] の学界展望を参照のこと）。ターニャ・クテヴァは、ブルガリア出身の言語学者で、現在はデュッセルドルフ大学にいる。最近、助動詞の類型論を文法化理論に基づいて考察した研究が公刊されている（2001年）。この『文法化事典』は、1991年から2000年にかけてケルン大学やカルフォルニア・スタンフォード大学行動科学研究センターで行われた10年に及ぶ研究の成果である。

本書はなによりも便覧として企画・刊行されている。文法指標の生起と発達に関して様々な具体的な言語事実が多くの論文に書かれてきたが、それをまとめ上げようというのである。実際、文法の発達なる問題への関心はここ20年間で目覚ましく盛り上がっている。西欧では、この現象の様々な局面を討議する多くの論考が現れた（特に [Lehmann 1982; Heine, Reh 1984; Heine et al. 1991; Hopper, Traugott 1993; Bybee et al. 1994] を参照）。それ故に、「文法化理論」なる研究思潮が存在すると言ってよからう。にもかかわらず、長い間、文法化の道程・方策のまとまったカタログが欠けていた。そうした道程・方策のかなりのものは何らかの言語共同体や言語圏に限られるものではなく、世界の実に様々な地域で規則的に採用されているのである¹。おそらく、このようなリスト編纂を最初に試みたのはハイネ自身（「文法化理論」の創始者の一人）とその仲間たちであった。[Heine, Reh 1984] の付録では、アフリカ諸語に特徴的で、彼らがこの書で詳しく記述した文法化の基本的道程・方策がリストアップされている。ハイネとクテヴァの2002年版本書に直接先行するのは、『概念転移：アフリカ諸語に於ける文法化過程事典』である [Heine et al. 1993]。これは、ケルン大学のグループが編纂したもので、『アフリカ学論集』の1分冊として少数で刊行された。（文法化の「道程・方策」の事典を刊行するのと並んで、文法化理論の「用語」事典編纂の試みもあった。1000頁以上の分量である詳細な3巻本事典 [Lessau 1994] を見られたし。）

¹原注1 【語彙的】意味が発達する際にとりうる道程・方策を体系化する課題は今なお未解決である（もっとも、これを成し遂げるのはずっと困難である。語彙の意味がとる道程・方策は文法的意味がとるものよりも明らかに何倍も多いからである）。この点に関して、[Zaliznjak 2001]に於けるいわゆる「意味の転移カタログ」制作企画の議論を参照のこと。

1993年の便覧は、およそ500の文法化の道程・方策について書かれている。言語資料の大部分はアフリカ諸語だが、他の入手可能なデータもひかれている。この本に比して、2002年版『文法化事典』の特徴は、データのよりバランスのとれた選択である。言語サンプルはより均衡がとられ、例として挙げられるのは最も確実でよく文証された例だけであり、しかも原則として、2語族以上で立証された文法発達道程・方策が考察されている。

本書の構成は、序章、使用文法用語〔概念〕の索引、事典本文〔Source – Target Lexicon〕、索引3種（転移のアルファベット順リスト〔Source – Target List〕〔Target – Source List〕、言語索引）と文献表となっている。略号、記号のリストもある。

「序章」(1-14頁)では、文法化の過程の基本的特質が述べられている。また、具体的言語事実の体系化の中で そうした事実を総括する本事典編纂の際に生じる諸問題が語られる。文法化とは、語彙形式から文法形式へ、文法形式から「より文法的な」形式へという発達過程である、と定義されている(2頁¹)。こうした過程では少なくとも4つの相互的メカニズムが作用している。

- ・【脱意味化】〔desemanticization〕つまり「意味の色抜き」(〔semantic〕bleaching)、
- ・【拡大】(extension)と呼ばれるもの、つまり形式があらゆる新コンテキストで徐々に使われるようになること、
- ・【脱カテゴリー化】〔deategorialization〕つまり文法化される要素がもとの自立的語彙素の特徴であった形態統語的特質を失うこと、
- ・【浸食】(erosion)つまり音的実体の弱化〔phonetic reduction〕。

本事典の著者にとって何よりも重要なのは、特別な【意味的】過程としての文法化である。この過程では、より具体的な「物的」(語彙的)意味を持った形式が一定のコンテキストでより抽象的な(文法的な)意味を表現すべく使われるようになる。例えば、人間の身体部分を示す言語単位(「背中」)が、空間的配置(「背後」)を示すために用いられる場合や、空間の中の動きを示す言語形式(「何かをなすべく動く」)が、状況の時間的指示(未来:「何かをなす」)を示すために用いられる場合である。言語形式が文法化へと至る意味過程こそ、本事典が記述する対象である。どのような言語単位が文法化されるのか、そして、何がもとの(語彙的)意味と最終的な(文法的)意味との関係の条件となるのか、に何よりも関心があるのだ。純粋な記述(あり得べき転移を体系化し、統一したフォーマットで提示)と並んで、ハイネとクテヴァのレキシコンでは、説明も行われている。各項目記事の注の中で、だいたいの場合、転移の動機が解き明かされており、性質上似た発達道程・方策が参照されている。

文法化は複雑で多面的な現象なので、『世界文法化事典』の編纂に当たって著者たちは当然多くの困難に行き当たった。こうしたことも彼らは「序章」で討議して

¹ the development from lexical to grammatical forms and from grammatical to even more grammatical forms

おり、最も問題のあるところでも採用することにした解決方法を論証している。たとえば、彼らの研究は、世界の 10 分の 1 足らずの諸言語のデータに基づいているため、彼らの事典が本当に「世界事典」なのか疑うことが出来るわけである。それでも、著者たちが正しく指摘しているように、より抽象的な概念（例えば、時間の概念）をより具体的な概念（例えば、空間の概念）を通して表現するという戦略は、おそらく普遍的なものであって、それ故、我々は、『事典』でまだ文証されていない言語にあってもこの戦略が現れると期待して良い。

ただし、文法化の全事例を厳格なフォーマット 「ソース(istochnik; source)からターゲット(rezul'tat; target)へ」 で提示したのはいささか単純化したきらいがある。まるで、ソースとターゲットが常にハッキリと互いに対立するかのようである。実際は、文法化は「連鎖的(chainlike)」タイプの過程であり、どのような発達も多くの過渡的な段階を経るもので、連続的な 離散的ではない 性格を有しているのである（このため、常に簡単に段階間の境界をひけるわけではない）。

このほか、もっと一般的な問題点もある。文法化が（ある具体的な事例で）既に生じたと断言できる場合、文法化は組み合わせさせた様々なパラメータに則っていなければならないのだが、必要な情報が全て文法記述で述べられていることはほとんどないのである。

さらに、文法化の過程にはソースとして単に語彙素だけでなく、構文全体が含まれることが良くある（英語の "is going to do「為すつもりである」" という形式を参照されたし。ここでは、「行く」という語彙素は一定の文法形式 現在進行形で、目的（不定形）指標 to 「ために」を伴っている）。それ故、語彙素だけ（例えば、動詞 go だけ）の転移の名を挙げるのはやはりかなりの単純化である。とはいえ、幾つかの場合、転移に関する注釈でより詳しい情報を与えることで、上記の欠点は取り除かれている。

第 2 の導入部「本書で使用する文法概念」(15-26 頁)では、文法的意味の特徴を述べるために著者たちが使っている 170 の用語ラベルがアルファベット順リストで示されている。用語には簡単な説明（厳密な定義ではない）がつけられ、上位カテゴリーへの参照指示もある。例：ABLATIVE (spatial, case), BENEFACTIVE (case), HABITUAL (aspect), EPISTEMIC (modality) など²。ロシア語圏の研究でも曖昧さなしに広く使われている用語（"PROHIBITIVE", "RESULTATIVE", "DIMINUTIVE", "RECIPROCAL" などの用語ⁱⁱ、上記に挙げた用語も参照のこと）と並んで、本リストには、著者たち自身によって（これまでの著作で）導入された用語も述べられている。例えば、AVERTIVE ("avertiv") というラベル 「現状の実現と実現されなかったこととの間の境界状況を指示する指標」¹、pochti, chut' ne 「かるうじて、あやう

² 原注 2 動詞カテゴリーに関する同様の文法用語リスト 『文法化事典』の著者たちも参照している が以前、[Bybee et al. 1994]の付録で提示された。

ⁱⁱ прохитив, резултатив, диминутив, реципрок

く)を想起せよ はⁱⁱⁱ、この意味を扱った論文に由来している [Kuteva 1998] し、様々なタイプの所有表現を示す用語 以下のものはハイネが自著[Heine 1997]で詳細に記述している。

- ・ A-POSSESSIVE(定語的所有、参照：属格標識もしくは英語の前置詞 of)
- ・ B-POSSESSIVE(述語タイプ構文で belong "属する" があるもの)
- ・ H-POSSESSIVE(述語タイプ構文で have "持つ" があるもの)

「文法概念」リストに、一見「文法」プロパーへのこじつけのように見えるものもあることは指摘しておいて良いだろう。例えば、ALREADY「既に」、ALSO「また」、EVEN「さえ」、EXCLAMATION「感嘆詞」、NEXT「次の」、ONLY「ただ」、ONE「1つ」、TWO「2つ」(数詞)、OTHER「他の」、SAME「同じ」、SOME「幾つかの」、SUCCEED「成功する」、TOGETHER「一緒に」を参照されたい。こうした事情は著者自身たちも気づいており、「文法的」意味と「非文法的」意味あるいは「語彙的」意味との間に厳密な線引きをしようとしているのではない、と述べている。ONLY もしくは TOGETHER タイプの意味を文法的意味として考察する理由は、こうしたタイプのものが「通時的な由来で生じるものと比べてより多くの文法的特質、より少ない語彙的特質を有している」(15頁^{iv})という事実による。

本書の基本部分は「ソースからターゲットの事典」本編である(27-316頁)。ここでは、400以上の「文法的発達」(文法化の道程・方策 [put' grammatikalizatii])

本書では取り上げられていない用語だが (と同じ)の事例が論じられている。項目記事の見出しはアルファベット順に排列されている。本文には、語彙的なソースから文法指標への転移の多くの事例(例えば、BELLY > IN, CHILD > DIMINUTIVE, COME TO > FUTURE, EAT > PASSIVE, GIVE > BENEFACTIVE, SAY > EVIDENTIAL, SIT > CONTINUOUS, THING > COMPLEMENTIZER, YESTERDAY > PAST など)や、ある文法的意味から別の意味への発達の事例(ABLATIVE > AGENT, ALLATIVE > DATIVE, COMITATIVE > INSTRUMENT, CONDITIONAL > CONCESSIVE, FUTURE > EPISTEMIC MODALITY, LOCATIVE > A-POSSESSIVE, PERFECT > PAST, H-POSSESSIVE > OBLIGATION, REFLEXIVE > PASSIVEなどを参照)。個々の転移はおのおの、様々な(可能な限り系統的に遠い)諸言語からの複数の例で説明される。その際、文例には、ほとんど常に、形態的分析が一行分、付与されている。特に良いと思われるのは、多くの事例で、転移が、もとの用法についても文法化された用法についても具体的な言語形式の使用例で例示されていることである。言語例のあとには短い注釈が入れられ、原則として、当該の転移の認知的性質、転移の普及程度、研究の進捗(文献表をつけて)が述べられている。

ⁱⁱⁱ 原書 17 頁: "almost, nearly"; marker for an action or event that was on the verge of taking place but did not take place.

^{iv} these items exhibit more grammatical properties, or fewer lexical properties, than the concepts from which they are historically derived.

概念的に近い転移への参照指示もある。

【付録】は本事典の活用を助ける。第1の付録(317 - 326頁)は、本書で考察される道程・方策が全て、「ソース>ターゲット」のフォーマットでアルファベット順に排列されている(すなわち、『事典』本文見出しの大文字が示しているままに)。第2の付録(327 - 336頁)でも、道程・方策がやはりアルファベット順に排列されているが、今度はターゲットからソースへの順である(かくして、例えば、ある文法指標がどういうソースを起源としてもちうるか情報が得られる)。こうしたまとめによって、本書で記述された「文法的発達」の過程には182のありうべきソースがあり(一次的なもの、つまり、語彙的なものと、二次的なもの、つまり、既に文法的なもの)144の文法化ターゲットがあることが分かる。ソースのうち最も多くの文法的意味をもたらすものは、LOCATIVE(11の文法化の道程・方策のソースとなりうる)、COMITATIVE(10)、GET(9)、ONE(9)、DEMONSTRATIVE(8)、SAY(8)、ABLATIVE(7)、ALLATIVE(7)、TAKE(7)、GO(7)。その他、GO TO というソースを持つ道程・方策が3つ)である。逆に、最終的な文法的意味にどういうソースがありうるかを見ると、CONTINUOUS(このターゲットには13のソースがありうる)、FUTURE(12)、CAUSE(9)、PASSIVE(9)、COMPARATIVE(8)、COMPLEMENTIZER(8)、HABITUAL(8)、PURPOSE(8)の順で多い。

最後の第3の付録(337 - 349頁)は、本書で言及された諸言語のアルファベット順リストで(上述のごとくおよそ500)系統的な所属が示されている。(残念ながら、言語リストには該当頁への参照指示がない。そのため、本事典の読者は、どの個別言語でどのような文法化の事例が本書で記述されているのかすぐには分からない)。巻末には総合的な【文献一覧】(36頁分)があり、本文で言及された全ての出典の他、言及されなかったが本書のテーマに関わるものが掲載されている。

ハイネとクテヴァ編の『文法化事典』は、疑いもなく、きわめて重要かつ有益な便覧であり、ずっと以前から求められていたものである。しかしながら、このような作業は今後も続けられるし続けるべきである。著者たち自身が指摘しているように、いま現在本書で取り上げられた過程は「将来の研究者があきらかにすることに比べれば氷山の一角に過ぎない」(13頁)からである。実際、本書では、きわめて稀で特殊なもの(例えば、ALONE > ONLY, BEAT > PRO-VERB, BOWELS > IN (spatial), BRANCH > CLASSIFIER, EAR > LOCATIVE, FIELD > OUT, FOOTPRINT > BEHIND, MAN > EXCLAMATION, SEE > PASSIVE)も含めて数百の転移が説明されているが、それでも、この事典では取り上げられていないがよくみつけられる文法化の道程・方策というのを幾つか指摘できる。例えば、RESULTATIVE > PERFEKT (アスペクト論の文献で広く議論された)、REZUL'TATIV > 間接的証拠性の過去、CMOTRET' [見る] > CONATIVE (「なす事を試みる」、例えば、チュルク語やドラヴィダ語で)、IDTI もしくは PRIKHODIT' [行く、至る](過去分詞を伴って) > 受動構文(例えば、インド・イラン諸語やイタリア語で)、PODNIMAT'SJA [揚

がる〕> INCHOATIVE (「なし始める」例えば、東南アジアの諸言語で³)、GOVORIT' [話す]> 順序数詞の指標(例えば、ナフ・ダゲスタン諸語で)など^v。

転移の記述のスキーマでも幾らかの改良が望まれる。例えば、著者たちが採用している視点が、文法化されるのは、原則的に、語彙素そのものではなくて、「より複雑な概念的な実体 語結合〔語句〕とか命題もしくはより複雑な構文ということもある である」(6頁^{vi})というものなのに、転移の記述でもとの構文の必要なパラメータ全てが常に示されているわけではないのである。例えば、分析的な動詞構文の文法化の事例では、意味を担う動詞(例えば、分詞とか接続分詞、一定のアスペクトの表示を持つことが多い)が、まさにどのような形式をとるかを知ることが重要であるし、助動詞の(つまり、"idti", "brat'", "khotet'" [行く、取る、欲する])などというタイプで本来、文法化されうる単位の 上述の英語の例 is going to 参照)文法化された文法形式に制限があるか、を知ることが重要である。

多数の具体的な言語現象を著者たちがどう解釈しているか詳しく論じるのは脇に置いて、ロシア語の幾つかの例にコメントすることにしよう。適切な形で示されているとは言えないのである。例えば、94頁で COPULA> AVERTIVE (この用語については上述)という転移を論じる際、例証の一つとして、ロシア語の小詞 bylo を持つ構文とその用例 Mashina bylo poekhala, no... [自動車はいったん発車はしたが]が、"The car nearly started out..." [自動車はあやうく発車するところだった]と訳されて、ひかれている。ロシア語の bylo をクテヴァがこう解釈するのは(例は、彼女の著作[Kuteva 1998]からの引用)正しいとは認められない。実際、この小詞をもつ構文は、状況が生じ始めたがすぐに止んでしまったことを示すか、状況の達成された結果がその後取り消されたことを示す(参照: Ja zakryl bylo okno, no ono tut zhe raspakhnulos' [窓を閉めるには閉めたが、窓はすぐに開いてしまった])、「中断された試み」あるいは「取り消された結果」という意味は、"avertiv" と同じ「反結果的」意味の仲間に入れることは出来るかもしれない([Plungjan 2001]での議論を参照のこと)。しかしながら、どの場合でも本来 avertiv な意味である"chut'", "bylo ne" [あやうくするところだった]は、bylo のある単純な構文では表現できない。

同様に、ロシア語単語 serdtse は、語根 sered-「中心」から派生した語で、本書で分析されている文法化の道程・方策 HEART(body part)> IN(SPATIAL)とは逆方向の意味発達の例である、という主張(171頁、匿名の書評子を参照する注で述べら

³ 原注3 運動と位置の動詞の文法化のありうべき道程・方策について詳しくは [Majsak 200; 2002].

^v РЕЗУЛЬТАТИВ > ПЕРФЕКТ, РЕЗУЛЬТАТИВ > прошедшее время косвенной засвидетельствованности, СМОТРЕТЬ > КОНАТИВ, ИДТИ или ПРИХОДИТЬ > пассивная конструкция ПОДНИМАТЬСЯ > ИНХОАТИВ, ГОВОРИТЬ > показатель порядковых числительных

^{vi} they concern more complex conceptual entities, such as phrases, whole propositions, or even larger constructions.

れている^{vii})には同意しがたい。第一に、"seredina">"serdtse"「中心」>「心臓」という上記の発達が生じたのなら、それは現代ロシア語のレベルではなく、恐らく印欧基語のレベルで考慮すべきものである。語源的にロシア語の *serd-ts-e* は、同じ祖語語根を持つ英語の *heart* やラテン語の *cor, cord-is* に対応しているからである（即ち、"seredina"「中心」から"serdtse"「心臓」の意味が生じたのは、遅くとも印欧祖語でだったはず）。第二に、さらに重要なことだが、"serdtse"という意味を持つ語が"seredina"という名詞の派生語であるとしても、この発達は、一方向の転移 "serdtse" (身体部分)>"vnutri"「〔内部に〕ロカティヴ指標」の反証例ではない。もとの名詞"seredina"は、文法的な「ロカティヴ指標」ではないからである⁴。ここに挙げた例は、著者達たちの主張を例示するものではなく、【語彙的】意味が発達する方向は単一ではないかもしれない、ということの例証なのだ。実際ここでは、"seredina">"serdtse"という転移があったかもしれない（もし、このような発達が印欧祖語で生じたとすれば）、即ち、*serdtse* は身体の配置場所によりその名を得たかもしれない。また、"serdtse">"seredina"という転移かもしれない（ロシア語単語 *serdtsevina*〔芯〕もしくは英語の *heart of a cabbage*「キャベツの茎」および、*in the heart of the city*「都心で」といったタイプの表現を想起されたし）、即ち、逆に、何かの中心部にあることが、人間の心臓の配置を通して記述されるかもしれないのだ。総じて、発達の一方向性の欠如は、語彙的意味の周知の特質である（文法的意味とは反対である）。上述の意味転移は、次の共通スキームで記述される。

"seredina" (語彙的意味) "serdtse" (語彙的意味) "vnutri"〔内部に〕" (文法的意味)

起源・系統による言語索引にも幾つか不正確なところがあることも指摘できる。例えば、337 頁にあるアイヌ語がアルタイ語族朝鮮・日本語グループに入れられている（通常、他言語から孤立した言語と考えられている）。逆に、342 頁でケツ語が孤立しているとされている（実際は、イエニセイ語族の現存の唯一の代表である）。諸言語の系統的な所属に関する情報が何に基づいているかも示されていない。おそらく、文献表で示されている一般的な便覧[Ruhlen 1987]なのであろうが、今時はより現代的で完全なものが刊行されている[Grimes 2000][Dalby 2000]。

幾つか気付いた点を述べたわけだが、それでも、ハイネとクテヴァの『世界文法化事典』は間違いなく「文法化理論」という領域での突出した刊行物である。これは、集められた素材の分量から言っても現段階で類を見ない便覧であり、文法の通

^{vii} 原書注 32 : An anonymous reader of an earlier version of this work noted that the directionality in this case [HEART (body part) > IN (SPATIAL)] could easily go both ways, giving Russian *serdtse* 'heart' as an example, which s/he says is a clear derivative of *sered-* 'middle'.

⁴ 原注 4 反証例とすることが出来るのは、例えば、「内部に」という意味の前置詞が、「心臓」という意味の自立語彙素へと変わるような場合である。しかしながら、このような発達はどこにも見あたらない。

時的発達過程という領域での 20 年に及ぶ精力的な研究の独特な総括である。新しい増補版のための今後の活動が俟たれる。

結論として言えるのは、『文法化事典』は、言語変化の問題に関心を持つ大勢の言語学者達にとって興味深いものだ、ということである。本書は、意味論、類型論、比較言語学の研究者にとって座右の書となりうる。加えて、言語学の隣接諸学の代表者たち 人類学者、社会学者、心理学者 にとっても、本書を紐解くことは有益であろう。著者たちのことばを借りれば、彼ら学者たちが「文法形式の発達に関わる人間行動は、自分たちの学問領域で観察する種類の人間行動とそれほど違わない、と気づく」(1 頁^{viii}) ことを促すからである。

文献

Zaliznjak A. 2001 – Анна А. Зализняк. Семантическая деривация в синхронии и диахронии: проект «Каталога семантических переходов»// ВЯ[Вопросы языкознания]. 2001. №2. [共時態・通時態における意味派生：『意味転移カタログ』草案]

Majsak 2000 – Т.А. Майсак. Грамматикализация глаголов движения: опыт типологии// ВЯ. 2000. №1. [運動の動詞の文法化：類型論の試み]

Majsak 2002 – Т.А. Майсак. Типология грамматикализации конструкций с глаголами движения и глаголами позиции: Автореф. дисс. ... канд. филол. наук. М. 2002. [運動の動詞構文と位置の動詞構文の文法化の類型論]

Plungjan 1998 – В.А. Плу́нган. Проблемы грамматического значения в современных морфологических теориях: обзор// Семиотика и информатика. Вып. 36. М., 1998. [現代形態論における文法的意味の諸問題：展望]

Plungjan 2001 – В.А. Плу́нган. Антирезультатив: до и после результата// Плу́нган В.А.(ред.). Исследования по теории грамматики. Вып. I: Глагольные категории. М., 2001. [Antiresultativ: resultat の前後]

Bybee et al. 1994 – J. Bybee, R. Perkins, W. Pagliuca. The evolution of grammar: tense, aspect and modality in the languages of the world. Chicago, 1994.

Dalby 2000 – D. Dalby. The Linguasphere register of the world's languages and speech communities. V.2. Hebron, 2000.

Grimes 2000 – B. Grimes (ed.). Ethnologue: languages of the world. 14th edition. Dallas,

^{viii} may discover that the kind of human behavior held responsible for the evolution of grammatical forms is not all that different from the kind of behavior they observe in their own fields of study

2000. (電子版 www.ethnologue.com も見られたし)

Heine 1997 – B. Heine. *Possession: sources, forces and grammaticalization*. Cambridge, 1997.

Heine et al. 1991 – B. Heine, U. Claudi, F. Hünemeyer. *Grammaticalization: a conceptual framework*. Chicago, 1991.

Heine et al. 1993 – B. Heine, T. Güldemann, Ch. Kilian-Hatz, D. Lessau, H. Roberg, M. Schladt, T. Stolz. *Conceptual Shift: A lexicon of grammaticalization processes in African languages*. 1993.

Heine, Reh 1984 – B. Heine, M. Reh. *Grammaticalization and reanalysis in African languages*. Hamburg, 1984.

Hopper, Traugott 1993 – P. Hopper, E.C. Traugott. *Grammaticalization*. Cambridge, 1993.

Kuteva 1998 – T. Kuteva. On identifying an evasive gram: action narrowly averted// SL. 1998. № 1.

Kuteva 2001 – T. Kuteva. *Auxiliation: an enquiry into the nature of grammaticalization*. Oxford, 2001.

Lehmann 1982 – Ch. Lehmann. *Thoughts on grammaticalization: a programmatic sketch*. Köln, 1982.

Lessau 1994 – D. Lessau. *A dictionary of grammaticalization*. Bochum, 1994.

Ruhlen 1987 – M. Ruhlen. *A guide to the world's languages*. V.1: Classification. Stanford, 1987.

(翻訳: こばやし きよし)

KOBAYASHI, Kiyoshi: On a Russian bookreview of B .Heine and T .Kuteva's "World Lexicon of Grammaticalization" (2002).